

ゾラの庭(下)文学の庭(4)

YAMASHITA, Makoto / 山下, 誠

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

203

(終了ページ / End Page)

224

(発行年 / Year)

2013-04

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008699>

ゾラの庭 (下) (文学の庭 IV)

Zola et les jardins

山下 誠

YAMASHITA Makoto

『ムーレ神父のあやまち』(1875) の庭

◀セルジュ・ムーレはレザルトーの小村の若い司祭である。敬虔で禁欲的な日々を送る彼のうちに抑えられていた性的欲動が目をさます。その力は激しい聖母マリア信仰へと変わり、宗教的恍惚、苦行の果てに彼は熱病で昏倒する。彼は廃園パラドゥーに住むジャンベルナとその姪のアルビーヌのもとに預けられる。セルジュはアルビーヌの看護のもとに回復し、ふたりの間には愛が生まれる。そして彼らはずいにパラドゥーの「秘密の場所」で結ばれる。しかし、セルジュはアルシャンジア修道士によってこの楽園から連れ出される。アルビーヌとの生活をあやまちとし禁欲生活に戻った彼のうちで愛の炎は完全に消えていた。それを知ったアルビーヌは庭園から集めた花に埋もれて自殺する。>

0.

『ムーレ神父のあやまち』は「ルーゴン・マッカール叢書」の第5巻として1875年発表され、多くの毀誉褒貶が交錯した作品である。しかし、この小説が19世紀初頭以来数多く書かれていた神父小説の系統に連なり、「自然と宗教の大いなる争い」をこれまではなかった「恋する神父」主題のもとに研究するというゾラの試みを実現したものとみなす点において意見は一致している。⁽¹⁾ この時自然とはまず人間的自然であり、神父のそれとは特に男性性である。生を慈しみ、享受

し、異性を愛し、産み育て、子孫を作る、この人間的自然は同時に人間を取り巻く世界としての自然の本性でもある。われわれがここで研究対象とするパラドゥー、悦楽と豊穡の地はこうした自然を表わし、そして、これらすべてを拒否否定する宗教と対立する。この観点においても評者の間に不協和音はない。

しかし、パラドゥーは「庭園」である。庭園はまったき自然ではない。人為が加わった自然である。もちろん、庭園が自然の本性の凝縮、あるいは象徴であると考えられることはできる。さらにパラドゥーは自然が人為を破壊し、支配者となっている廃園である。しかし、それはどこまでも「王と王妃の帰還を長い間を待ちわびる」空間、庭園である(1345)。『薔薇物語』の庭園を筆頭に庭園は西欧の伝統において恋愛のための悦楽の場所でもあった。しかしロクス・アモエヌス、心地よき場所は常に庭園である必要はなく、パラドゥーはたとえば不毛の荒野の一画に湧き出た泉が作る小さな森と花咲く草地であればよいのである。⁽²⁾

すなわち、この3部よりなる小説の中央に位置し神父の「あやまち」が犯される重要な舞台であるパラドゥーの本質、庭園という存在規定がパラドゥーを生命力にあふれる自然に短絡し、宗教と対立させる構図の中では看過されているのである。

本論はしたがって何故パラドゥーが庭園として設定されたかという問題意識から出発する。ゾラはパラドゥーを庭園とした理由を示してはいないが、それが意識的であったか否かに関わらず、庭園であることは意味を持ち、一定の意味を可能にする。ゾラはその環境を受け入れ、よしとして物語を展開するのである。本論はパラドゥーを庭園という視座で読み直すことによってパラドゥーとさらに小説全体の新たな解釈を試みるものである。⁽³⁾

1. 1

庭園パラドゥーはレザルトーの村やセルジュが司祭を務める教会のある荒野の一画、村から一里足らずのところ突如現れる緑の空間である。⁽⁴⁾ この肥沃の地を潤すのは4つの泉であり、それはマスクル川の源となって、セルジュの住む教会につながっている。

しかしこの庭園は閉じられた空間として現れ、高い壁が全体を囲み、「一生かかっても歩きつくせない」(1329) 広さのため庭園に住むアルビーヌすら境界の壁をみたことはないと言う。

庭園の形状についてはゾラ自身による見取り図、解説があり小説中の描写と重ね合わせることによってほぼすべてを知ることができる。その敷地全体はほぼ円形をなし、街道沿いの円周部の一画に城と別棟の館があり、庭園はこの城を中心とする半同心円状に構成されている。すなわち、一方の端にある城の近くがいわゆるフランス式整形庭園にあたり、テラスや花壇や池や彫像などがあり、その周りに徐々に自然風景式部分が果樹園、草原、川、岩場、森のように展開される。「小ヴェルサイユ」と称されているが、18世紀中ごろに造営されたことや川や岩場の配置を勘案するならば、整形式庭園を自然風景式で囲む18世紀後半以降の折衷式の庭園である。

パラドゥーの形態としてはそれが「廃園」であることをあげておかねばならない。⁽⁵⁾ 1世紀にわたって放置された庭園では野生化した自然が人為のすべて、花壇、彫像、小道を覆いつくし破壊し我が物顔に支配しているのである。しかしパラドゥーが廃園であることの重要性は自然の支配に屈した人為の強調にあるのではない。自然の侵略支配にもかかわらず、人為のすべてが完全に消え去ったわけではなく、庭園の基本構造は失われず、のちに言及するようにこの構造に従って主人公らは行動するからである。すなわち人為の庭園の力は潜在し保持されているのである。廃園となりながら庭園であり続ける、これがパラドゥー「廃園」の特徴である。

というよりはむしろ、パラドゥーは庭園から廢園になったのではなく、最初から廢園であったというべきであろう。なぜならルイ 15 世の時代パラドゥーを造った貴族はたった一つの季節を過ごしただけでそこを去り、翌年に城は焼失、そしてそのまま主なき一世紀となるからである。放棄の原因は貴族が伴ってきた女性の死によるものと示唆されている。

庭園のどこかに埋葬されたというこの女性の部屋にアルビーヌは住み、そこでセルジュは彼女の看護を受ける。彼らの庭園探索が進むにつれて部屋の壁に描かれていたぼやけた絵が徐々に鮮明となりはつきりと往時の姿を現す。これらの絵こそは庭園が秘めたよみがえる力を表わすものである。探索を導く庭園の力がそれらの絵画を復元させたのである。

もちろん庭園は絵のように往時のままに復元されたりはしない。しかし、それは失わなかった力を一世紀後に行使し主人公たちを導き、その行使の中で自らも庭園としてよみがえるのだと言えるだろう。パラドゥーは保持され自然の支配の中によみがえる庭園の力であるために廢園として誕生したのである。

庭園の形姿に続いて物語の時点での庭園の住民の素性を考察しておかねばならない。住民とは庭園の端の館に住む 70 歳を超える老人ジャンベルナとその姪で 16 歳になるアルビーナである。ジャンベルナは庭の管理者としてやってきたが城に残された大量の本を読みはげしい無神論者唯物論者となった、そして何年も前から庭園には背をむけて館の小さな菜園を耕して生きている。ゾラの残したプランではヴォルテール主義の独学者である。この人物のもとに預けられた少女がアルビーナで、都会の寄宿舎にいたお嬢様であるが、パラドゥーに来て以来庭園に魅せられ毎日をそこで過ごしている。今や庭を駆け巡る野生児と化しているが、都会の生活を知り、読書にも音楽にも親し

んだ、非常に利発な少女である。⁽⁶⁾

ジャンベルナが啓蒙の人であったとは言い難いにしても、少なくとも二人の人物像は無知蒙昧な原始的な自然状態よりは書物や都市、すなわち文化文明、社会生活とパラドゥーとの結びつきという側面を示唆するものである。アルビーヌは物語の終わり近くで庭園に戻ることを拒むセルジュに対し大きな都市に出て二人で生活することを提案し、縷々都会生活の夢を語ることを厭わない。

1. 2

ゾラは物語の舞台、パラドゥーとレザルトーの村と教会、司祭館の関係を示す地域の地図も書いている。この地図によるとパラドゥーはレザルトーの村と教会を結ぶ線分を底辺とする三角形の頂点部分にあるように見える。そして物語は三部からなり、第1部と第3部はレザルトーの村と教会が中心で、中央の第2部がパラドゥーで展開される。この構成はトリプティック、すなわち三幅対とみなされることが多いが、これら3枚の絵は同一平面上に並んでいるのであろうか。すなわち同じ世界に属しているのであろうか。三角形の底辺からパラドゥーを見るとそれは遠くに引き下がって見えるだろう。それが示唆するように三幅対の物語の中央、パラドゥーは他所とは異なるレベルの世界なのではないだろうか。

三部に渡って展開されるムーレ神父のあやまちの物語は次のように要約される。

第1部で非人間的禁欲生活に安住しようとするセルジュの性質、その性本能覚醒へと導く外界の刺激、そしてセルジュの異常なまでのマリア信仰、マリアへの没我的な愛が示される。第2部はこれを受け、パラドゥーでセルジュはアルビーヌと性愛を成就する。パラドゥーは繁殖力にあふれ、生殖をことほぐ外界に一致し、アルビーヌは愛と一体化の願望においてマリアと一致する。そしてこれらの全面的否定が

なされるのが第3部である。マリア信仰もアルビーヌへの愛もすべてが過ちとして退けられセルジュは神父生活に望んだ、その遺伝的性質が求める非人間的無性的な神父性へ回帰する。

このように各部は厳密に関連付けられ、三部に渡る展開に齟齬はない。すなわち、肉の誘惑に負け、その過ちを懺悔するという神父の物語＝「ムーレ神父のあやまち」ととらえる限りにおいては3枚の絵は滑らかにつながり同一平面に並ぶということである。

限りにおいては、としたのはもうひとつの物語があるからである。それは「あやまち」そのものの物語である。あやまちは第2部のパラドゥーで犯されるが、単に神父のセルジュがアルビーヌの誘惑に負けるのではない。熱病に倒れ意識を失ったセルジュはパラドゥーで新たな誕生を迎え、アルビーヌに導かれつつ、精神的肉体的に元の25歳まで成長した結果として彼女と肉体的に結ばれるのである。その過程が「あやまち」そのものの物語である。パラドゥーの出来事が聖書のエデンの園の物語に擬せられていることはだれの目にも明らかであるが、このこともパラドゥーという三幅対の一つの絵が独立した物語を形成していることの証左となる。〔7〕

P. ウーヴラルは創世記のエデンとの類似に着目し、第2部では総称としての男と女 (*l'homme et la femme*) が主人公であり、その前後の物語はセルジュとアルビーヌという個別の具体的男女 (*un homme et une femme*) を主人公としている、と述べている。〔8〕すなわちこの小説には二つのレベルがあり、ひとつはセルジュ・ムーレとアルビーヌのあやまちの物語、もう一つは創世記のアダムとイヴに等しい男女のあやまちの物語なのである。三幅対は見様によって平面に並んでいるようにも見え、物語の場所の配置の三角形を意識すれば中央部が左右より後退して独自の図柄を持っているようにも見えるわけである。

『ムーレ神父のあやまち』はしたがって入れ子構造になっている。

しかし、入れ子構造であること自体にさしたる意味はない。入れ子の枠のふたつに緊張関係がありそこから意味が生じなければ、含まれた物語は単なる挿話に過ぎないからである。この物語構造には三つの場所が対応していた。大枠にレザルトーの村と教会、小さな枠にパラドゥーである。パラドゥーの物語は大きな物語に溶け込んでいる、しかし、庭園パラドゥーは三幅対の中央に後退した特殊な場所である。この場所と他との対立があるのではないか。そしてその緊張関係が語るものがあるのではないか。

2. 1

これまでは地図と小説の三部構成を対応させ、パラドゥーとレザルトーの村と教会を三つの場所としてきたが、パラドゥーと大枠としての他所を比較する場合には教会としてひとまとめにした場所をふたつに、すなわち教会そのものと教会付の司祭館の裏庭に分けて考察しなければならない。教会空間が神父セルジュのものであるに対し、裏庭はその妹デジレの場所である。それは22歳の肉体は持つが「知恵遅れ」で「頭の中はからっぽ」(1262)の娘が、ウサギ、ニワトリから豚や牛まで、種々雑多な動物に囲まれ、母親のようにそれらを世話しつつ過ごしている空間である。

本章では、大きな物語、「ムーレ神父のあやまち」の主要テーマ、豊穡さ、生殖力に加えてこれまでに述べてきたパラドゥーの位置、形姿、その住民、成り立ちなどから浮かび上がる次の諸点、すなわち死および生、知、時空の開閉性をテーマとしてとりあげ、まず、レザルトーの村、デジレの裏庭、教会がいかなる場所かを考察することとする。

2. 2

自然の豊穡さ、すなわちあらゆる生命を生み、殖やす力の横溢、

なによりもそれがレザルトーの村（以下レザルトーと略す）とデジレの裏庭（以下裏庭と省略）が示す特徴である。「（裏庭の動物たちの）あの生気の熱気、絶え間ない出産が、眼下の村（レザルトー）にも展開しているのをつよく感じるのであった。・・・レザルトーの人間も、四方を丘陵で囲まれた中、雌という土壤で増殖している家畜の群れ同然なのだ」（1273）。動物や人間のみならず、石ころだらけの荒地さえ夜には「情欲に駆られ奇妙な輾転を繰り返す・・・灼熱の太陽に酔いしれて、月光のもとで腹と胸をつきだし、いっそうの豊穡を夢見ながら仰向けに横たわる」（1308）大地の女神のようにセルジュには現れる。

レザルトーと裏庭は際限なき発情状態の場である、このあまりに一面的な設定には裏面がある。それは愛の欠如の強調である。裏庭はもちろん、これに比されるレザルトーの男女の間にも愛の「いとなみ」はあるが、精神的な合一を求める恋愛感情は存在しないのである。レザルトーについてはフォルチュネとロザリーの結婚話を中心であるが、これはこの素朴な愛の欠如を戯画的に描くためのものである。子供ができたために結婚することとなった彼らにとって、婚姻の儀式で夫婦愛を説くセルジュの言葉は理解不可能であり、うんざりさせるだけである。

セルジュが第3部の初めに上述の愛を語る教会はというと、これはアルビーヌへの愛とないまぜになる聖母マリアへの愛の空間から、殉教のキリストへの愛、絶対者神への愛を経て、ついにはそのような人間的な心理状態を超越した空間となる。なぜならセルジュは「偉大なる愛の飛躍」（1480）のはてに「生の境を越え」（1510）、人間としては死んだうつろな神の家となるからである。うつろな神の家とは教会でもある。すなわち言うまでもないことであるが、そこは情欲の炎をかきたてる力、自然の繁殖力、生殖力が容認される場所ではない。アルビーヌへの愛欲の情はセルジュの妄想の中ではグロテスクな動植物の軍団と化して教会を攻撃し破壊し支配者となるが、現実において

は完全に否定され、排除されて終わるのである。

かくして教会は生を超越するものとしての死の君臨する場所となる。では、レザルトーと裏庭において死はどのような位置づけにあるだろうか。裏庭は実は教会の墓地に隣接している。そして裏庭の貪欲な動物たちは墓地で採られた草が好物で、大騒ぎをして奪い合うのである。それは墓地の草が「死者たちからいのちを吸収」(1458)しているからである。生は死を通していのちを引き継いでいく。ここで死は生の間断なき転換を媒介するものなのである。流れる血に興奮した仲間へ傷ついた脚を食べられるメンドリや生まれただばかりで食べられてしまう子ネコたちなど多くの残酷な死のイメージ(1268)は死をも従属させる生の盲目的な力のすさまじさを表現するものにほかならない。

レザルトーにおける死も同様である。それは身近にあり、生の営みに埋没し、その存在が生の意味付けになんらかの影響を及ぼすことはない。⁽⁹⁾

すなわちレザルトーと裏庭では死はそのものとして認識されることがない。それは裏庭の動物たちは生きることのみを追い求め、レザルトーの住民は「けだもの」のようにわずかな土地を耕し、生き延び、増殖すること以外に関心がないからである。言い換えるならばそれらは「頭の中がからっぽ」な豊穡の女神シベール＝デジレの無知が支配する場所であるからである。したがってもちろんそこには文化と呼べるものの存在はない。

一方教会は修道士アルシャンジアが教師を務める教会学校を擁する。そしてセルジュは神学校の5年間、司祭となるべくさまざまな知的教育を受けてきた。しかしレザルトーと裏庭に対し教会が文化文明につながる知的場所であるかといえば、むしろ逆であり、これら三者は同一のグループをなしていると言えよう。セルジュについて知は教会知というべきものに過ぎず、様々な傾向があったとはいえ読書はキ

リスト教の世界に限られる神のための「独占的な教育」(1306)であり、したがって彼は相変わらず神を知った幼い6歳のときの感じ方、考え方、判断力しかないに等しい。そして修道士アルシャンジアは教師とはいえ、以前の農夫の時と同じく下品、粗暴から抜き出せず、その知識も教理問答以上のものではなく、子供たちにそれ以上を教える必要を認めない。すなわちそこを支配しているのは偏狭にして自己充足的な知的鈍重さに過ぎないのである。

鈍重さは、進歩発展を許容するものではない。パラドゥーの経験を経たセルジュは荒れ果てた教会の修復に取り掛かり、窓を修理し、漆喰を塗り、塗装をし直す。これを見た修道士は「きれいになりすぎる」(1436)と繰り返し非難するであろう。一方、レザルトーを変化させるものはなにもない。それはアルトーという一人の男から生まれて、幾世期の間「結婚はすべて村の中で行われ」(1231)、だれもが「広い外界のことなど考えたこともなく」(1232)「他の世界から全く孤立して生息している」(1232)300人からなる場所なのである。レザルトーは時空に閉じられた空間である。そしてデジレが支配する裏庭も果てしない生と死を繰り返すのみの閉じられた時空間であることは言うまでもないであろう。

レザルトーと裏庭には盲目的な生が横溢し、教会では死が君臨する。それらにおいて生と死は互いを認識しあうことなく、人間的な精神的愛はその場所を持たない。それらはまた自らのうちに閉じこもりその成員とその世界の維持を存在の第一目的とする時空両面に閉鎖された場所である。⁽¹⁰⁾そしてそこには無知ないし偏狭な固定的な知しか認められない。もし文化というものが生死に翻弄される原始状態から脱却し、他者との交流の中で知を発展させ社会を形成していくなかに存在するものとするなら、この小説の3幅対の二つに現れる空間に文化はないと言わねばならない。

3. 1

われわれは小説『ムーレ神父のあやまち』が入れ子構造を持ち、大枠の物語にレザルトーと教会（および裏庭）が対応し、小さな物語にパラドゥーが対応していると考えた。そしてこのパラドゥーが大枠とは別の次元の世界を構成しているのではないかという仮定のもとに、まず大枠の世界の特徴を考察し上記の結果を得た。

以下では、これらの特徴の光の中でパラドゥー自体を考察の対象とし分析する。大きな物語に破綻なくしっかりと連結された豊穡な自然としてのパラドゥーはこの光の中で庭園パラドゥーとしての別の様相を明らかにするだろう。

3. 2

異性との精神的合一を求める心情としての愛はデザルトーからも裏庭からも教会からも排除されていた。それがパラドゥーには存在し、あり続ける。その愛への道を描くのが、セルジュの心神喪失からのめざめと回復、彼を看護するアルビーヌとの関係の進展を描く第2部は第7章までである。性愛を示唆する植物、肉欲をかきたてうる二人の身体にも関わらず、セルジュとアルビーヌは庭園のかつての整形部分バラ園から白百合の野を経巡る間に純粹の愛を育て上げる。25歳と16歳の彼らは10歳の子供のように無邪気に清純に愛し合い、抱擁は頬を寄せ合うにとどまり、その一体感に彼らはうっとり満足するばかりである。

セルジュにとってこの愛はバラと白百合が語るように聖母マリア信仰が秘めていた若者の自然な異性へのあこがれの実現である。マリアとは信仰のベールの陰に「若者の甘美な恥じらいをおびた愛の秘密」(1287)「愛の欲求」(1287)を受け止めていた存在であり、バラ園のアルビーヌとは初めて「ベールをつけずにあらわれた」(1344) マリアに他ならないのである。

すなわちすでに述べたように第1部と第2部を大きな物語レベルで結ぶマリア信仰がここで一人の男性の新たな誕生から始まる少年期の純愛の形成の物語に転換されている。

そして生殖や繁殖に直結しない純愛の成立の後に初めて肉の愛は始まらねばならない。第8章における庭の探索の休止の一日はこの関係を明示するためにあると言えよう。庭の探索を再開するということは庭の経験の上に新たな庭の経験を積み重ねることだからである。すなわち「愛の見習い期間」(1407)ののち、庭の新たな探索のなかでセルジュとアルビヌは自らの身体を意識し、庭の植物たちの肉体の結合への誘いを受け入れ、ついには身も心も合一し完全な愛の成就に到達するのである。したがって官能の悦楽は愛を深めさえすれば、それを生殖、繁殖の本能のうちに還元し無化することはない。「愛する」という言葉は二人の関係のすべてを表わす言葉として第2部の最後まで「とめどもなく」繰り返される。そしてついに結ばれたアルビヌへ捧げるセルジュの言葉はかつての宗教的色彩に包まれた純愛の対象としてのマリアへの熱愛の言葉の変奏に他ならないのである。⁽¹¹⁾

3. 3

「愛の見習い期間」という言葉が示すようにこの性愛の成就に至る過程は成長である。最初の庭園探索の中で二人は10歳程度の愛の形に到達し、これを卒業し、次の探索に移るのである。第2部において愛に続く重要なキーワードがこの成長である。

セルジュの高熱による意識喪失からの回復は「第二の誕生」であり、生誕以前の闇の状態からの再生として描かれる。彼はアルビヌの看護の中で光を感じ、触覚を取戻し、話し方を覚え、歩き方を練習する。そして25歳の肉体の中に蘇生するのである。そして愛の成長がある。さらにアルビヌに関しても、彼女は庭園の探索の中で徐々に自分の女性性に目覚めていく。⁽¹²⁾

この成長にさらに社会的人間への成長というものを重ねることができることが重要である。これは第9章以降の庭園探索の後半に行われる。彼らは肉体的成長と純粹の愛が達成されたあと、まさに自然が支配するとされる空間で人間社会における夫婦生活を学習するのである。二人は庭園の一画を家と定め、戸棚として木の洞に家財を整理し、魚を取り、火をおこし、料理をしようとする。その中でアルビヌは主婦の役を、セルジュは夫の役を演ずる。これは「ままごと」であり、ままごととは社会的人間形成のための模倣学習である。すなわち、回復するセルジュと彼に寄り添うアルビヌにとってパラドゥーは生殖本能、繁殖欲に支配された自然状態への回帰の場ではなく社会的存在としての人間への再生の場なのである。

この成長、再生が二人が廃園パラドゥーをくまなく歩き回るうちに成し遂げられることにも注目しなければならない。先に述べたように城近くの整形形式庭園部分のバラ園から白百合の園への散策が純愛を完成し、愛の成就是整形形式部分の外に広がる自然風景式部分の数日にわたる探索—庭園を造った貴族があるひとりの女性と悦楽の時を過ごしたという「秘密の場所」を求めての探索の果てにやってくるとするなら、この過程は同時に廃園の残された構造の力に従いつつ、庭園パラドゥーの構造の再生する過程でもあるからである。

二人は秘密の場所を目標とする探索の中で人間的に成長し、そして繁茂する緑の混沌の中にうずもれていた一つの世界をよみがえらせる。セルジュが部屋の中であれこれと夢想した庭園パラドゥーの図面(1327)は彼らの足跡によって鮮明に描きだされるのである。

3. 4

それでは、二人を導く庭園の構造の力はどのような形で現れるのか、またそのよみがえる構造とはなにか、その考察を以下に行おう。

二人が歩き回るパラドゥーの支配者は驚くべき種類の放任された植物である。花や木々によって覆い尽くされ破壊され、痕跡となった庭の形に従って二人は歩を進めるが、彼らに力を及ぼすのはなによりも植物たちである。ではそれは放任された野生の植物の力か。そうではない。その力とは庭園を造り、花や木々をある意図のもとに配置するときに働く力、実は痕跡としての庭の形を作ったと同じ人為の力なのである。

庭園という構造を作る力はパラドゥーの植物の中に《～のようだ》が代表する表現によって転移され、花や木々はそれ自体であるよりこれによって与えられた顔、人為の世界の事物となる。たとえば、なでしこは「繻子」、勿忘草は「ビロード」、スグリは「ルビー」、あざみは「燭台」、チューリップは「美しい陶器」、ペチュニアは「女性の肌着」、アマは「毛髪」、カーネーションは「手負いのライオン」、ボタンは「卒中もち」、ひまわりは「巨人」、さくら並木は「高層の家々」……例は限りない。⁽¹³⁾

セルジュとアルビーヌを導くのは植物自体ではなく、これら比喩・象徴が作り出す事物のつらなりである。典型的な例として二人を性愛行為の始まりとしての接吻に導く岩場のサボテンたちを挙げておこう。サボテンはすべてがクモ、毛虫、骸骨、まむし、ポリープ、等々となって悪夢の中に彼らを引きずりこみ、疲れ果て不安に駆られたアルビーヌは我を忘れてセルジュの腕に身を投げ出してしまう(1389)。⁽¹⁴⁾

植物の変身において特に注目すべきは「擬人化」と都市の構成物化である。

本研究の初めにも述べたようにゾラの作品全体において生物、無生物を問わず擬人化が多く特徴的であるが、それがことにこのパラドゥーでは著しい。二人が庭園に初めて足を踏み入れた日のバラ園では十種を超える無数のバラがすべて少女、王妃、娼婦、ブルジョワ夫

人等々として現れ、彼らを愛の道に誘う。特に果樹園や森の中に二人の探索が及べば木々は女の子、流浪の民、長老古老、森の父、花嫁、女神、兵士、タイタン、「気品と雄々しさを兼ねそなえた人たち」(1378)となって愛の成就へと導くこととなる。この擬人化は木々、花々ととどまりはしない。川も泉も、庭園のすべては擬人化され、『薔薇物語』の登場人物のごとく「行為者」として存在していると言って過言ではないのである。

さらに、その行為者たちの世界とは彼らとその他の事物たちに押されて進むセルジュとアルビーヌの足跡によみがえる庭園の形姿であるが、それは彼方にもうひとつの別の世界を映し出す。それは「高層の家々」「ピサンチン風円形建造物」が連なり、「赤銅のドーム」「鐘楼」がそそり立ち、「入り組んだ街路」「長いアーケード」の奥に「中央市場の屋根」が見える場所、すなわち都市である。二人のままごと遊びの家はその空間に建ち、二人がはじめての口づけを交わす森は「巨大な列柱」が立ち並ぶ高い身廊をもつ大聖堂として彼らを迎える。すなわちセルジュとアルビーヌの人間的成長と庭園の構造の明瞭化と並行し、その構造の透かし模様の背後に、庭園の植物そのもの、比喩・象徴によって現れる事物そして「行為者」たちによりひとつの都市的空間が描き出されていくのである。

3. 5

庭園に立ち上がる都市の姿を認めるときわれわれはこのパラドゥーの住民、アルビーヌが都会からやってきた利口な少女であり、セルジュを都市生活に連れ出そうとする存在であったことを思い出さざるを得ない。すなわち閉じられたデザルトー、デジレの裏庭世界とは異なり、パラドゥーは取り巻く高い壁にもかかわらず実は他所とのつながり開かれた世界なのである。その対比は自閉的なデザルトーや裏庭からパラドゥーを訪れるものがない一方、パラドゥーからはアル

ビーヌがデザルトーの教会学校に、また教会にも裏庭にも出入りする点にも表わされている。

われわれはパラドゥーを取り巻く外の世界の閉鎖性について語ったとき、時間についても言及し、それを生あるいは死が一方的に支配する進歩発展のない閉鎖的時空間とした。ではパラドゥーについてはどうか。パラドゥーは時間が流れる空間である。そこでは大地の目覚めとともに新たなセルジュが誕生し、アルビーヌとともに成長する、そしてこの成長は愛のはぐくみと「秘密の場所」の探索を伴いつつ行われる。すなわちパラドゥーには《成長》や《探索》が表わす前へ前へと歩みを推し進める力が支配的に働いているのである。

その力はどこから生じるのかというならば、廃園パラドゥーに重なるように現れるいわばヴァーチャルな庭園世界があくまで人為の世界、文化文明の世界であるからところからであることはすでに言うまでもないであろう。

そしてこの人間世界では死は時を刻む標識である。死の認識によって生は充実し、死の意識が継承を生み、発展を可能にする。すなわち、デザルトー、裏庭、教会とは異なり、パラドゥーでは死は生とともにあるものとして現前し、認識されている。

すなわちパラドゥーは廃園であり、廃園となった理由は一人の女性の死であった。城主の貴族が伴った女性は作られたばかりのパラドゥーで一シーズンを過ごし、セルジュが回復期を過ごすアルビーヌの部屋で死に、そして二人が「秘密の場所」として探し求める場所に埋葬されたのであった。純愛という愛の第一段階が終わった時点でアルビーヌはセルジュに女性の話をし、その禁断の悦楽の場の探索が始まる。庭に導かれての愛の成就への道のりは死の場所から死へ場所への道行でもあることを知っての上で彼らは出発するのである。「そこで過ごすひとときは人間の一生にも匹敵する」「そこで抱き合って死

にましよう」とアルビーヌは口にするだろう（1357）。

もちろん二人は秘密の場所で死にはしない。庭園全体が発する愛のいとなみの咆哮の中に死はかき消されるからである。そして教会に戻ったセルジュはいわば生なき死の中に生きながらえ、アルビーヌのみが死を受け入れる。彼女は部屋を花で埋め尽くしその中で窒息死する。しかしそれはセルジュを失った失意の果てではない。それは「十分に長い、満ち足りた、美しい」生を過ごしたからであり、深まる秋の中、「再び甦る希望を抱き」つつ「互いに幸せな死を願う植物たち」と同じように、「彼らの命を彼らの死にいたるまでともに生きよう」とするからである（1511）。すなわち、その死は生とともにある、生を含んだ死であるからである。

3. 6

われわれは「ムーレ神父のあやまち」という三幅対の中央に位置するパラドゥーが大枠とは別の次元の世界を構成しているのではないかと考え、まずレザルトー、裏庭、教会というパラドゥーを取り巻く世界を、そして庭園パラドゥーそのものを、いくつかの視点を中心に考察した。そこで見いだされたパラドゥーは神父のあやまちという大枠レベルの物語に齟齬なく連結しつつも、取り巻く世界とは対立しているといって過言ではない世界を構成するのであった。それは通常言われているような豊穡なる自然の生殖力、繁殖力のみが絶対的支配者として君臨する場所ではない。豊かな自然の中で、愛が求められ、死が認識され、人間的成長が行われ、進歩発展の時間が流れ、構造化する力が働き、外部との交流を拒まない世界である。それは盲目的な生、あるいは絶対的な死が支配する時空に閉ざされた場所に対立する、人間が文化的存在として生きる世界なのである。したがって、この庭園には、死の平安、無知の安穩を選び、「人の中に降り立つこと」（1506）をこぼむセルジュの場所はない。再び訪れた庭園で、アルビーヌの語

る大都市での生活の夢を前に激しい恐れと拒絶を示したセルジュは、彼女によって庭園から追放されねばならないだろう（1508）。

4.

パラドゥーが別種の世界を構成していることを確認するとき、先に紹介したウーヴラルが指摘したセルジュとアルビーヌの総称的な男女としての性格、聖書のエデンとパラドゥーの類似は、単なる模倣参照を超えた意味合いを帯びてくる。まず明白な『創世記』からの借用には次のようなものがある。アルビーヌはセルジュの「体から出てきた」（1339）。二人が肉体的に結ばれた後、アルビーヌは自分の体の露出を恥じ、植物で隠そうとやっきになる。また、知恵、誘惑を示すものとしての蛇への言及があり、「生命の木」（1402）の下で愛の成就是なされ、また大天使に由来する名の修道士アルシャンジアがセルジュをパラドゥーから連れ戻し、戻らないように監視する。もちろん、パラドゥーという名が地上の楽園パラディ＝エデンから来ていることも忘れてはならない。

ではパラドゥーをエデンと結びつけることは、セルジュとアルビーヌの行為をキリスト教的コンテクストに決定的に取り込み、パラドゥーを「誘惑」と「あやまち」の場とするものなのか。大枠の物語レベルとしてはそうであるが、しかしわれわれは一方でこのエデンへの参照に潜むパロディ的性格に気づかねばならない。それはことにパラドゥーの入り口でいぎたなく眠り呆けるアルシャンジアの姿に現れるが、あからさまな参照自体がエデンを相対化しパラドゥーを似て非なる世界として現出させるのである。

すなわち、エデンへの参照は創世記の物語の下に新しい世界の創造の物語を滑り込ませるためにあり、キリスト教的観点からの「誘惑」「あやまち」に依拠しようとするものではない。もしパラドゥーを舞台とする第Ⅱ部の主人公が総称としての定冠詞をつけた男女であるな

らそれは『創世記』のアダムとイヴではなく、新しい世界を開く創世記の男女なのである。それは述べ来った庭園パラドゥーの指し示す世界、豊穡なる大地、自然の原動力と人間の知性が真に調和融合する世界、一言でいうならば理想の庭園としての世界である。

もちろん新しい世界はパラドゥーにおいてはセルジュとアルビースが庭園を経巡るにつれ、行為の背後に、繁茂する草木の下に、おぼろげに浮かび上がるものでしかない。パラドゥーとそれを取り巻く世界の対立相違、それらの間の緊張関係に気が付かれるとき初めて姿を現すものである。しかしそれはゾラがパラドゥーを美しい豊かなたとえば林間の地ではなく庭園として設定した瞬間に、「自然と宗教の大いなる戦い」としての神父のあやまちの物語の背後に現れていた世界なのである。なぜならゾラにとって庭園の本質とはいくつかの作品を通して考察したように、新しい世界を開く力の保持、可能性への信頼であるからである。

5.

本研究の冒頭で述べたように、庭園は19世紀にいたるまで世界の箱舟、「宇宙と社会の縮尺模型」であった。しかし、このマイクロコスモスとしての庭園はパリ万博の時代を境に消えていく。なぜなら世界が庭園という表象では表現できない存在の仕方をし始めたからである。その結果、庭園は個人的な快樂の場、あるいは個人の内面世界や外界と個人の間を表象する場としての庭園と、市民の心身の健康保持増進という目的を持つ空間、都市機能のひとつを果たすための公園とに大きくは分かれていく。

しかし、自然主義の領袖であり、近代資本主義社会に鋭い観察眼を持って対峙したにもかかわらず、ゾラはロマン派的残滓とともに前時代的な庭園観を最後まで持ち続けた。すなわちゾラの作品に数多く現れる庭園は本論が扱った7つの庭園が明らかにしたようにそれぞれ

の小説世界を、したがってそれら小説が描きだそうとする世界を凝縮する空間なのであり、それは庭園が世界を19世紀後半になっても相変わらず表わすことができるという信念に基づいてなされたことといわねばならないのである。

ここに矛盾が生じる。たとえば『金』、『ボヌール・デ・ダーム百貨店』『獲物の分け前』『獣人』などで新しい社会を動かすものが、流通、ネットワーク、コミュニケーションといった「流れの秩序」であることを看破したゾラと整形形式庭園が象徴するような「形の秩序」に世界の表象を託そうとするゾラとの間の矛盾である。⁽¹⁵⁾ おそらく、ゾラが「ルーゴン・マッカール叢書」で描く庭園が小説世界を縮約しながらも破壊されたり、廃園であったり、あるいは悲劇的結末をもたらすなど、新しい世界に対して生産的、建設的な存在でないのはこの食い違いから生じているのであろう。ゾラにおいて、庭園は新を生み出す異種なるものの交流の場、それを可能とする世界の神話的な根源力を保持する場所であり続けるが、新しい世界は庭園という姿では現れえないからである。

しかし、ゾラはこの矛盾を乗り越えることはしなかった。彼が選んだ道は回避であったといえよう。なぜなら彼が選んだ道、資本主義社会から離れた楽観的進歩主義に基づく空想社会主義世界は旧来の庭園的世界観と容易に調和しうるものであるからである。

《使用テキスト》

Emile Zola, *Les Rougon-Macquart : histoire naturelle et sociale d'une famille sous le second Empire*, éd. Pléiade, tome 1, 1960

*引用箇所については各所で必要に応じテキストのページのみ示した。訳文については清水・倉知訳（藤原書店）を参照し、適宜私訳を用いた。

《注》

- (1) B.N.,N.af.,Ms.10303,fo56 publié dans « *La Fabrique des Rougon-Macquart*, édition des dossiers préparatoires » Honoré Champion, Paris, 2003.
- (2) またさらにこの小説の特徴たる豊穡たる自然の讃歌、その本能の発露の賛美の見事な描写という賞賛の言葉が多くあるが、ゾラは人間の本能、自然を一面的に肯定していたわけではない。ルーゴンマカール叢書、それ以後に共通するものはくびきとしての人間の本性である。それは乗り越え支配しなければならないものである。
- (3) 本論は見過ごされてきたパラドゥーが庭園であることの持つ意味を明示することを第一の目的とするものである。したがって紙幅の制限上物語の他の多くの要素との関係についての言及が省略されていることをあらかじめのべておかねばならない。
- (4) パラドゥーは *jardin* あるいは *parc* と呼ばれる。《 *jardin* 》がいわゆる庭園部分を指すとすると、《 *parc* 》はそれとともに周辺部の草地や森を含むと、使い分けができる。しかし、ゾラはこの2語を厳密に使い分けてはいないので、本論はパラドゥーを常に「庭園」と呼ぶこととする。
- (5) 管理人ジャンベルナが住んでいるが12年も前から庭園に足を踏み入れたことすらない。彼が送り込まれる前は無人であったと解釈できる。
- (6) たとえば、レザルトー村の教会学校に通った2か月のあいだにその賢さで生徒全員の崇拜的になる。(1277)
- (7) エデンとの類似については4において後述する。
- (8) Pierre Ouvrard, *Zola et le prêtre*, Beauchesne Paris 1986, p.72
- (9) ロザリーとフォルチュネの子供は彼らの結婚後間もなくして死亡し、アルビーヌと同時に埋葬されるが、埋葬の場でさえ彼らの関心は子供の死に向かわず、「ときおり棺のことを忘れてしまう」。
- (10) もちろんこれはセルジュが選んだ自己安住世界としての教会について述べるものであり、教会一般に関するものではない。
- (11) 第2部でセルジュがアルビーヌに捧げる言葉 (pp.1406-1407) は第1部 pp.1289-1292 のマリアへの熱愛の描写に組み入れることができよう。またさらにそこでマリアは庭という姿をとって現れもする。
- (12) パラドゥーを経巡るうちに起こるアルビーヌの女性性の発見については Olivier Got, *Les Jardins de Zola, psychanalyse et paysage mythique dans Les*

Rougon-Macquart, L'Harmattan, Paris, 2002 が詳しい。

(13) 特に花壇部分を巡るとき (pp.1347-1352) に例は多くあらわれる。リストは膨大になるので省略する。擬人化、建築物についても同様である。

(14) 二人は不安のあまり性愛の動作を中断する。おぞましいサボテンは性愛の裏面に存在するタナトスの表象であり、これに対する不安感は二人の愛が純愛の段階を越えた時生じ増大していく。

(15) 参照。北河大次郎『近代都市パリの誕生』河出書房新社、河出ブックス、2010、p.38